

通常学級における読み書きで困難を示す児童への 正確性及び流暢性に焦点を当てた指導・支援

学籍番号 219216

氏名 富田菜々香

主指導教員 庭山和貴

副指導教員 梅川康治

1. 背景と目的

文部科学省（2022）は、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」において、小・中学校の通常学級における知的発達に遅れはないものの学習面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は、約6.5%であると報告している。同調査において、学習面における「読む」又は「書く」に著しい困難を示す児童生徒の割合は、約3.5%であり、平成14年及び24年に実施された同調査から、対象地域や一部の質問項目が変更されたため、単純に比較することは難しいものの、学習面で著しい困難を示す児童生徒は増加傾向にあるといえる結果となった。そして、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒のうち、授業時間内に教室内で個別の配慮・支援が行われている児童生徒の割合は、約77.5%である。これにより、現在の教育現場の状況を踏まえても、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒に対しては、授業時間内かつ在籍学級での指導・支援の実施が主流であることが分かるものの、同項目において、授業時間以外に個別の配慮・支援が行われている児童生徒の割合は、約49.1%にとどまっている。また、文部科学省（2021）は、支援を実施するうえでの通常学級におけるアセスメントの必要性について指摘している。先行研究や文部科学省の指針・報告より、通常学級に在籍する読み書きで困難を示す児童が増加傾向であることと、彼らに対して、十分な支援が行き届いていない現状があることが分かった。

これらを踏まえ、本実践課題研究では、通常学級における読み書きで困難を示す児童に対して複数の方法でアセスメントを行い、それに基づいて正確性及び流暢性に焦点を当てた指導・支援を実施し、その効果検証を行うことで、対象児童の授業時の負担軽減や、読み書きのスキル向上をめざすことを目的とした。

2. 実践課題研究Ⅰ：基本学校実習の取り組み

基本学校実習Ⅰでは、令和3年度の4年生の児童の実態を把握するために、授業時の読み書き場面における対象児童の行動を観察・記録し、読み書きで困難を示す児童の実態把握を行った。基本学校実習Ⅱでは、児童の実態と担任教員との相談を踏まえ、書きの正確性に課題が見られたA児を対象児童として選定し、3C学習法による漢字の書き支援を行った。その結果、限定された場面ではあるものの、A児は綺麗で正確な漢字を書くことができるようになり、介入前よりも抵抗感なく課題に取り組む様子が見られた。

3. 実践課題研究Ⅱ：発展課題実習Ⅰの取り組み

発展課題実習Ⅰでは、令和4年度の3年生の児童の読み書きにおける実態を把握するために、基本学校実習同様、授業時の児童の行動観察・記録を行った。また、MIM-PMによるスクリーニング検査を実施し、対象児童を選定した。そして、対象児童であるB児・C児の実態に合わせた授業時の学習支援を実施した。その後、対象児童の反応を基にその効果を検証した。結果として、先行事象と後続事象を工夫した学習支援により、対象児童の授業時の負担が軽減し、学習活動に参加する様子が見られた。それと同時に、スキル向上をめざした効果的な指導の必要性を再認識することができた。また、データを用いて話し合いを行ったことで、担任教員に協力を仰ぎ、発展課題実習Ⅱより開始予定だった放課後の小集団及び個別指導の実施について、実習校と保護者の同意を得ることができた。

4. 実践課題研究Ⅲ：発展課題実習Ⅱの取り組み

発展課題実習Ⅱでは、発展課題実習Ⅰから継続してB児・C児への授業時の学習支援を行いつつ、新たにD児への授業時の学習支援を開始した。さらに、対象児童3名と希望する児童に対して放課後の小集団及び個別指導を実施した。そして、指導の効果検証とその後の指導方針を決定するために、プログレス・モニタリングとして、MIM-PMを計2回実施した。指導の具体的な内容としては、多層指導モデルMIMの指導教材を用いた特殊音節の読み指導や、刺激ペアリング手続きによる特殊音節の読み指導が挙げられる。計2回のMIM-PMの実施により、放課後の小集団及び個別指導の成果や指導方法や内容、学習環境における課題が明らかになった。また、放課後の指導によって、読み書きに対する対象児童の抵抗感や負担を軽減し、授業時の学習活動における対象児童の行動に変容が見られた。

5. 総合考察

本実践課題研究では、主に授業時の行動観察・記録やデータを活用したアセスメントを行い、それに基づいて、対象児童に対して読み書き指導・支援を実施し、対象児童の授業時の負担軽減や、読み書きのスキル向上をめざした。指導・支援を通して、読み書きのスキルが十分に向上したとは言えないものの、ほとんどの児童が読み書きに対する抵抗感が減り、先行事象と後続事象を工夫した支援によって、負担が軽減され、介入前より授業に参加できるようになった。実践を通して、児童の実態に応じて柔軟にアセスメントの方法を選択し、指導・支援方針を決定する必要性を感じた。そして、読み書きの正確性・流暢性に注目することで、アセスメント及び指導・支援の方向性を定めることができると感じた。また、MIM-PMのような児童の伸びを表すデータを活用することで、指導・支援の効果を検証し、その後の指導方針を決定するだけでなく、教員同士のコミュニケーションを円滑に進めることができると実感した。これにより、学校教育においてデータを活用することで、児童にとってよりよい指導・支援に繋がると考えた。